

第283回
株式会社テレビ新潟放送網
放送番組審議会

- 1 開催日時 平成23年11月28日（月）午前11時より
- 2 開催場所 テレビ新潟放送網本社会議室
- 3 委員総数 8人 出席委員6人

出席委員

大矢 純一	副委員長	吉原 浩	委員
碓井 真史	委員	大久保 千春	委員
田村 明子	委員	尾畑 留美子	委員

会社側出席者

代表取締役社長	前川 磐
専務取締役（報道・制作・国際担当）	奥野富士郎
専務取締役（営業・事業・編成担当）	永原 良太
編成局長 兼 放送番組審議会事務局長	駒形 正明
報道制作局長 兼 報道部長	稲田 裕之
編成部長	中川 保彦
制作部長	小木 裕介
合評番組プロデューサー	羽田 朗
事務局	海津 智洋 紫竹 聡子

4 議 題

1) 番組合評

「夕方ワイド新潟一番第3部

『シリーズ 中越地震7年“伝えたい”東日本の被災地へ』

〔放送 : 10月17日(月)「中越地震の経験を生かす」〕

〔放送 : 10月18日(火)「中越の小学生が見た宮城県の被災地」〕

〔放送 : 10月19日(水)「身体と心の健康維持 求められるケアは」〕

(説明: 番組プロデューサー 羽田 朗)

2) 会社報告

① 10月の視聴者の意見。 (報告: 番組審議会事務局)

② 講じた措置、公表など定例の報告等。(報告: 番組審議会事務局)

3) その他

5 審議の概要 (委員の意見)

会社側から、「夕方ワイド新潟一番」第3部の県内ニュースで毎年10月に中越地震の被災地取材特集をシリーズで組んできて7年目を迎えたこと。特に今年は3月に東日本大震災が発生し、県内に今でも7000人を超える人が避難しているという状況を踏まえて、中越地震の復興の歩みや、経験や教訓を東北の被災地に伝えたいというテーマで取材し放送したもので全6回シリーズ番組の第1回目から3回目までの番組であることなどを報告した。

●東日本大震災に関してはエキセントリックなニュースを目に

することが多いなかで、この番組は中越地震被災からの目線で取り上げていてとても新鮮だった。

●ボランティア活動では足湯サービスや心の声をメモしたり本にして伝えていくという優しい気遣いに溢れている特集だった。

●小学生の活動報告では、小学生には見えない凛々しい顔をしている印象だった。女の子の「怖くて悲しい」というコメントが彼らの気持ちを集約している感じだった。

●中越地震には無かった津波やその瓦礫。そして生活が一瞬にして崩壊することを僅か10歳あまりの子供たちがどのように受け止めたのかということが大変興味深く見せてもらった。

●震災直後のボランティアと、その後も長期的にボランティア活動を続けていくことが大切であると改めて感じた。番組タイトルにある“伝えたい”というテーマが阪神淡路大震災から中越地震、そして東日本大震災へと通っていると思った。

●被災地のみなさんと支援者のみなさんがとても良い表情をしていると思った。これは取材する側とされる側の信頼関係がきちんとしているからだと思った。

●心のケアの話では小千谷市でペットを預かってくれながら交流していくケースが紹介されていた。被災を経験していることの強みで被災者たちが言わなくてもわかってくれる。通じ合えるということがあって、少しずつ関わってくれるこうしたことが心の癒しには大事なことなのだと思う。

●3つの特集を通して弱い立場の人々、老人・子供・乳飲み子を抱えた女性のみなさんのケアをどういう風にしていかなければならないかを改めて考えさせられた。長岡で、平日の避難訓練というものが行われた。土日の訓練ではなく現実に男手の無

い、年寄りや子供、乳飲み子を抱えた女性ばかりの平日に起きる災害を想定して避難訓練を行った。結果、日中に誰が居るのか、誰に手を差し延ばさなければならないのかといった実態が見えてきた。

●心のケアの特集で、子供を抱えたお母さんは自分の心のケアまで手が回らないでいてストレスが溜まっているもの。同じ境遇のお母さん同志が手を差し伸べられるような団体があって彼女らを結びつけられたらいいと思った。

●被災されている方は助けてもらっているということで自分の立場を一番下に置いてしまっている。そんな時に足をお湯に入れてあげて手を揉んであげたりして、下から目線で見上げるような形で話を聞いてあげる。心をほぐしてあげる。その場でできること、相手が求めていることは何かを考えてボランティアの人たちが行動されていることがよくわかった。

●長岡市陽光台の仮設住宅跡地の映像では原っぱになっている映像だけでなく、当時の映像も紹介してくれれば比較できてよかったと思った。

●被災地を見た子供たちの映像から、子供の感じる力って実は大人とそんなに変わらないのだと思った。生活者としては勿論未熟ではあるが自分が体験してきたことはきちんと大人と同じくらい受け止め感じる事ができると思った。

子供たちに被災現場を見せて、被災地の小学生の話を聞いたりして交流してきたのはとても良かったと思った。子供たちのコメントも「自分たちの命を大事にしたい」「感じたことや、これからどうしていかなければいけないということを帰ってみんなに伝えたい」「小学校だけではなく地域のみんなに伝えたい」な

どあってとても感心した。

●経験したことは次に繋げる、次に活かすという責任が中越地震を経験した私達にはあると思っている。東日本大震災のことも常に関心を持って、出来るお手伝いはしていくという気持ちを改めて考えさせてくれた企画だと思った。

●どんな巨大な出来事でもいずれは風化していく。だんだん忘れられていく。忘れられないようにするのが区切り区切りで行う報道なのかなと思う。それも過去と現在の比較だけではなく中越地震被災地の現状と東日本大震災の現状を合わせて報道するのは意味があるし興味も持たれると思った。

●中越地震の経験を活かして東日本大震災に伝えたいこと、支援したいことを紹介し報道するという姿勢は良かった。新潟県民はこういう支援をしていますという形で東日本大震災の被災現状を知ることができたのは良かった。

●東日本大震災後7ヶ月の被災地の現状を子供たちに見せるというのはとても意味あることだと思う。小さな小学生でも現地でははしゃいだりせず、ただショックを受けて帰るのでもなく、しっかりしているのはたぶん小さい頃に被災地経験をした記憶が僅かでもある中越の子供たちだからだろうと思った。

●検証ものは回顧ものになりがちだが、中越地震に軸足を置き、現在の話であり過去の話ではないんだという問題提起としてのメッセージがしっかり伝わってきたと思った。

●社会福祉士の北村さんの活動を見て、とてもテーマに相応しい人を見つけて取材していると思った。また陽光台の原っぱになっている映像については当時を考えればとても効果的な演出になっていたと思った。

●被災地で何が必要かということはその場にいた人でないとわからないものだと思う。お金やモノではなく人と人との繋がり
のケアに焦点を当てたというのはとても良かったと思った。

●小学生が被災地へ行って見聞きするというので、事前に先生からの話や送り出す親との会話もあったはずであり、そうした子供たちのまわりの大人たちがいろいろな心配りをした様子が見られたらもっと良かったと思った。

●県内に 7000 人も居られる避難されている方々がこの番組を見てどのように感じるかを考えれば、現場での映像から様々な支援があることを感じてもらえるのではないかと思った。

6 会社側の報告

1) 放送番組に関して申し出のあった意見の概要

10月……105件。

2) 訂正放送、取り消し放送の実施状況

前回審議会(平成23年10月24日)から昨日(平成23年11月27日)まで、総務省に届け出た訂正放送、取り消し放送はありませんでした。

7 審議機関の答申または意見(前回審議会)に対してとった措置

1) 前回、第282回審議会では「夕方ワイド新潟一番『4000回スペシャル』」を審議いただきました。委員の意見は議事概要にて記者制作スタッフ、社内に周知しました。

2) 番組審議会議事録を全社員・スタッフに回覧しました。

8 今回の第283回放送番組審議会の公表

1) テレビ新潟本社、長岡支社、上越支社の県内事業所に議

事概要の書面を準備しています。

- 2) 当社のニュースで審議会の概要を放送します。
- 3) インターネットのT e N Yホームページに議事概要を掲載します。

9 参考事項（委員への配布資料）

- ・ 10月の視聴者からの意見、問合せ等の集計表
- ・ 10月の単発番組制作一覧
- ・ 民間放送新聞（10/23, 11/3, 13号）
- ・ BPO 報告（No. 103号）

以上